

2024年11月3日 召天者記念礼拝(降誕前第8主日礼拝)メッセージ

「なげかわしくてごめん」

水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 23章 25-33節

先週の水曜日、10月30日。私の娘が誕生日でしたもので、私は仕事からの帰り道にスーパーによって食材を買って自転車で帰ろうとしていたところ、一人の少年とすれ違いました。その子の顔をちゃんと見ていたわけではなく、すれ違う瞬間まで気づかなかったのですが、すれ違う前から遠目に「なんか普通の人と違うなあ、頭がちょっと大きいかな、茶髪？」とか思いながら、すれ違いざまにちらっとその子の顔を見たら、「うわっ!猫や!」めちゃめちゃリアルな猫の顔をした少年が、スーパーに向かってすたすた歩いておられて、「何今の?」と、ドキドキしながら考えていたら、数年前には、商店街で同じく帰り道にホラー映画で有名な「貞子」が、裸足でよたよた歩いているのとはすれ違って、その時もドキーっとしたことがありまして、「ああそうか、ハロウィンか」と合点がいきました。でも、よく考えたら、ハロウィンは10月31日ですよ。子どもだったからよかったものの、大人だったら通報されていたかもしれませんね。

本日は、キリスト教の暦では、クリスマスへのカウントダウンが始まった降誕前節第8主日であるとともに、「聖徒の日」または「召天者記念日」ということで、これまで私たちと同様に信仰の家族として歩いてこられ、今は先に神様の御許に召されている方々のことを改めて思い出しつつ、それらの方々の魂と共に礼拝を守る「召天者記念礼拝」であります。今日はどこの教会にいても、きっとこのように亡くなられた方々のお写真を並べながら、一緒に礼拝が守られていることと思います。今日のお祈りにもありましたように、また、この後に歌います賛美歌にもありますように、私たちの信仰の先輩である方々のことを思い、その生きざまに倣って、私たちもこの世の歩みを最後まで歩み尽くすことができるようになりたいと思います。

さて本日の聖書は、マタイ福音書 23章、イエス・キリストがエルサレムに迎え入れられた後、神殿の境内で様々な論争をする中で、律法学者やファリサイ派の人々を非難するという話の一部です。特に余計な解説はいらぬようにも思えますが、私たちの信仰生活、あるいは日常生活も、この偽善者と呼ばれているファリサイ派や律法学者たちと同様、イエスさまに非難されている可能性はないでしょう

か。「杯や皿の外側はきれいにするが、内側は強欲と放縦で満ちている」。外見だけうまく取り繕っておきながら、実は欲が深く、自分のことばかり中心にして人のことなど考えない勝手気ままな自分はいないか。自分を正しいと思いたいために、他人の粗ばかりを捜し出し、自分の欠けに目を向けることを忘れてはいないか。そんな自分を改めて振り返り、まず内側からきれいにせよ。内側がきれいになっておれば、外側もおのずときれいになるものだ。そういえば、かつてイエスさまは、食事の前に手を洗うの洗わないのということでも議論になった時に、「口から出てくるものは、心から出てくるので、これこそ人を汚す。悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口などは、心から出てくるからである。これが人を汚す」と言われました(マタイ15章)。悪意や下心に満ちた顔つき、うそや悪口を吐く者の顔つきの汚わらしさ。うまく取り繕っているつもりでも、神様はお見通しだ。だからこそ、まず内側をきれいにせよ。イエスさまは、私たちにもそう言われているように思えます。

「白く塗った墓のたとえ」もそうです。ユダヤでは、死者の墓は汚れたものと考えられており、そこに巡礼者たちが間違っただけで触れてしまったりしないように、墓を白く目立つように塗っていたのだと言われています。自分の内側の汚れや醜さが知られないように、あえて外側を美しく、近づくものはばかられるほどに美しく取り繕っているのではないか。無理してカッコつけているのではないか。自分の醜さが周囲にはばれてしまうことを恐れているのではないか。そんな化けの皮は、いずれ剥がれるのだ。やはりここでも、イエス様は「内側から清めるところからやり直せ」ということを言われているように思います。

そして3つめの災い。律法学者やファリサイ派の人々は、かつての預言者の墓を建てたり、記念碑を飾って「私たちだったら彼らを殺す側にはつかなかっただろう」などと、いけしゃーしゃーと言うわけですが、その先祖たちだって、自分が間違っただけでしているとは思っていませんでした。むしろ正しいことをしたと思っていたかもしれません。そして、子孫である彼らが同じように、イエスさまや弟子たちを拒絶し、迫害することが正しいと思いこんでいる時点で、彼らは預言者の血を流した先祖と同じ側に立ち、その血塗られた伝統をしっかりと受け継いでいる子孫であることを自ら証明してしまっているというわけです。つまり、結局のところ、いくら外見を取り繕って清く正しく見せ、善い行いをし、聞こえよい言葉を口にしても、私たちが自分の内面を清めてゆく、すなわち、自分を優先する代わりに他人を尊重

すること、自分が正しいと思い込むことなく謙虚になること、人のあらを探すのではなく人の良さを探すことのできる目を持つこと、自分の欠けた部分に恐れず目を向けること、そのような内面を清める努力なしには、必ずメッキは剥がれ、先祖たちが犯した罪のマス目は満タンになり、自ら地獄の裁きを招くことになるのだ、それが災いでなくて何であろうかと、イエスさまは批判しておられる律法学者やファリサイ派の人々を通して、私たちにも問いの石を投げかけておられるわけです。

ここでイエス様が批判しておられる律法学者、ファリサイ派の人々は、私たちの代名詞でもあります。私たちも、この人々と何の変りもないわけです。「いや、オレはこいつらとは違う!」と言う人もいるかもしれませんが、もうその時点で「アウト」のような気がします。そんないわゆる偽善者たちにイエスさまは「災いあれ」と言われる。しかし、「いくらなんでも呪いの言葉はひどすぎませんかイエスさま?」という気がして仕方ない。今回新しくなった聖書協会共同訳ではこうなっていますが、ひとつ前の新共同訳聖書では「あなた方は不幸だ」となっています。こっちのほうがまだましか。岩波訳では「禍だ、お前たちは」。本田哲郎神父訳では「あなたたち偽善者はなげかわしいことだ」となっています。私としては、この本田神父訳が一番しっくりきます。確かに私たちは偽善者のそしりをまぬかれないですが、しかし私たちは自分で自ら偽善者になろうとしてなっているわけではない。きっと、律法学者たちもファリサイ派の人々も、あなたも私も知らぬうちに偽善者になってしまっているだけなんです。イエス様の呼びかけによって、私たちが目を覚まし、そこから抜け出すことができるかもしれない。だから「呪いをかけるのはやめてください。『なげかわしいわ』といったぼやきにとどめておいてくだされば、私たちはまだ頑張れそうです。なげかわしくてごめんなさい」。私たちは「へいへい、どうせ偽善者ですよ」と開き直るのではなく、イエスさまからの問いかけを謙虚に受け止めていたいと思います。天上にある先輩たちも、きっと私たちのことを見守り支えてくださって、時には何らかの形で助けてくださるかもしれないし、イエス様からも「災いあれ」ではなく「なげかわしいなあ、お前たちは」って言われていると思って、「ごめんなさい、イエス様」っていう気持ちで、私たちは内面から清めてゆく努力をしていきたいと思っています。